

第7回 JLPP 翻訳コンクール 仏語部門講評

日本文学研究者、翻訳家

フランス国立東洋言語文化大学教授

アンヌ・バヤール＝坂井

それぞれの言語に訳し難い表現があるのは言うまでもないが、日本語の「嬉しい悲鳴」もその一つかもしれない。これは修辞技法の一つ、矛盾する語句をつなぎ合わせた表現法である撞着語法（英語、フランス語でのオクシモロン）の良い例なのだが、これをそこにあるユーモアと困惑感を損なわずに訳すとなると翻訳者は頭を抱えてしまう。で、何故このようなことを思い浮かべているかという点、今回の翻訳コンクール仏語部門の応募者数が百名に達したと知らされたときの正直な反応がこの「嬉しい悲鳴」だったからである。

これだけの応募作品が集まったことは、まず、フランスにおける日本文学に対する関心、翻訳に対する熱意が、この数年間の異常事態を乗り越えていまだに健在、いや乗り越えたからこそより高まっていることの証しであろう。そして、もちろんすべての応募作品が素晴らしいものであるとは期待できなくとも、相当の数の方達が、一応の水準に達する翻訳を創出するだけの日本語力と文章力を備えていることを意味しており、世代交代が進みつつある仏語圏での日本語文学の翻訳の将来を考える上での明るい要素であることは間違いない。

しかしまた、審査するものとして、悲鳴を上げたくなかったことも確かである。これだけの応募作品をどう選り分けるか、特に優れた翻訳を読み落とさないためにどうするか、など課題は多く、物事をスムーズに運んでくださったJLPP事務局の努力に心からの敬意を表したい。

さてそのようにして最終選考に上がってきたのは、11名分の課題作品2点の翻訳、併せて22点だった。審査員の意見が完全に割れてしまうのでは、と査読の作業に入る前に心配していたのだが、それは杞憂に終わり、最終討議に入ると全員の評価が驚くほど似通っていたことが判明したのである。誤訳などの問題を除けば、翻訳の評価は全く恣意的で、主観的などとは思わなけれ。ある文章を日本語からフランス語に移す時、何をどう伝えるべきなのか、といったことは文章の「読み」の根本的な問題と繋がり、そこで読者の代表者である審査員たちは共通の認識を持つのである。

今回の課題作は様々な異なった才能を駆使することを翻訳者に要求していた。川上作品の翻訳の最も難しいところは、作者特有の「ずれ」の感覚を、フランス語の文法を崩さずにどう表出するかであったろう。また、作中の会話の部分の、これも相当ズレている話し言葉をどうフランス語で、口語性を保ちながらも俗っぽくなく訳し得ているか、といった点にも私は注目した。その両方の面から、最優秀賞を受賞したアケレールさんの翻訳は群を抜いていたと言える。フランス語での「川上弘美らしさ」とはまさにこのようなものなのでは、と思わせる出来であった。優秀賞の、ウェンドラーさん、ウダさんの翻訳も他の応募作品に比べて非常に優れていた

ことは間違いなく、その口語性のバランスがもう少しうまく取れていれば、と思わせる出来であった。

そして保坂作品であるが、この文章の特徴は、エッセイでありながら、文体と論の筋運びに遊びの余地、とでも言えるものを含ませている点で、そこをどう訳すか。フランス語でのエッセイの持っている、下手すると理詰めがちな文体を和らげながらも、話の展開に読者を巻き込み、しっかりと終わりまで連れて行くには、相当な文章力を要し、三人の受賞者の翻訳が、まさにそのような文章展開を可能にしている点に感心させられた。

「嬉しい悲鳴」をあげたくなるくらいの多くの応募作品の中、これだけ優れた翻訳を読む機会を与えられたことは、そのようなものがあるとして、「翻訳賞審査員冥利」に尽きる、と言うべきであろう。